

職人について

小嶋祥三

日本は職人を尊重する傾向があるらしい。江戸から明治にかけて、日本の職人の技に外国人は驚嘆した。陶器など輸出品の包み紙だった浮世絵版画が、モネやゴッホなどの画家を魅了した。その影響はガラス細工など工芸品にも及んだ。所謂ジャポニズムである。明治政府はこれらの職人の作品を博覧会に出品し、また輸出して外貨を稼いだ。時代をさかのぼって、戦国大名が茶碗を宝物のように扱ったことは有名だ。豊臣秀吉が朝鮮半島に攻め込んで、陶工を拉致したが、かれらは日本で大切に扱われた。当時の半島では考えられない待遇だったようだ。道具をとりに一時的に半島に戻った陶工もいたらしい。朝鮮半島の日用雑器が日本では宝物のように評価されたというのは面白いことだ。

職人にはこの道一筋的なところがあり、日本人はそれが嫌いでない。何事も〇〇道にして、その道を究めようとする。日本人はそういう人をバカにすることなく、尊重するところがある。ヤル方も技や道を究めるのが目的で、利益や名声を求めているわけではない。オタクがはびこる背景だろうか。

職人はカラダを使ってモノを作り出す。そこには結果として競争といった要因も入ってくるかもしれない。そして、結果は作り出したモノ、すなわち事実によって評価される。アタマによる論争は結果の評価が難しいので、論争のための論争になりがちで、空理空論、奇弁や虚言など、相手を論破する技ばかりが発達する。不毛で無意味な結果ばかりが蓄積し、発展がない。そうなると、勝てばよいということになり、倫理、道德などは歪んだものになりがちだ。

科学の理論は実験結果、事実によって評価される。その点では職人の技は科学と同じ側にある。日本に職人を尊重する傾向があったのなら、それは日本の科学の発展の素地になったかもしれない。それはまた、合理的な思考や判断、さらには最近話題の民度に関係するかもしれない。しかし、日本製品には「安かろう、悪かろう」の時代があったし、とても合理的とは思えない判断で戦争に突き進んだ過去がある。鏡はよく磨いておかなければならない。

自閉症スペクトラムへの介入にはいくつかの方法があるようだ。症状は多様で、年齢などの要因で介入の効果は変わってくるだろう。その難しさにつけ込んで、アヤシゲな人たちがアヤシゲな方法を提案、推奨することもあるだろう。親たちは藁にもすがる気持ちだろうが、**Evidence-based** のアプローチの重要性はしっかりと認識するべきだろう。